

## ねぎのネギアザミウマが多発傾向 ～ 防除を徹底し、食害を防止しましょう ～

### 1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

7月1半旬に行ったねぎ（夏どり）の巡回調査（全県10地点）の結果、ネギアザミウマの食害株率は平年を上回り、34.0%（平年23.2%）と高かった（図-1）。

7月1日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、東北日本海側の気温は平年並か高いと予報されている。

これらのことから、今後もネギアザミウマの発生密度が高まり、食害（図-2）がさらに拡大することが懸念される。

### 2. 防除対策

- 1) ほ場内外の除草に努める。
- 2) 本害虫が多発しているほ場では、土中の蛹からの羽化や葉肉内の卵のふ化により、薬剤による防除後も発生密度が低下しない場合があるので、7～10日間隔で2～3回薬剤散布を継続する。薬剤の選定にあたっては収穫前日数に注意する（表-1）。
- 3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。
- 4) 茎葉散布剤の散布液量は、生育量に応じて100～200 L/10aとする。展着剤を必ず加用し、葉先から株元まで薬液が十分付着するように畝の両側から丁寧に散布する。

### 3. 資料

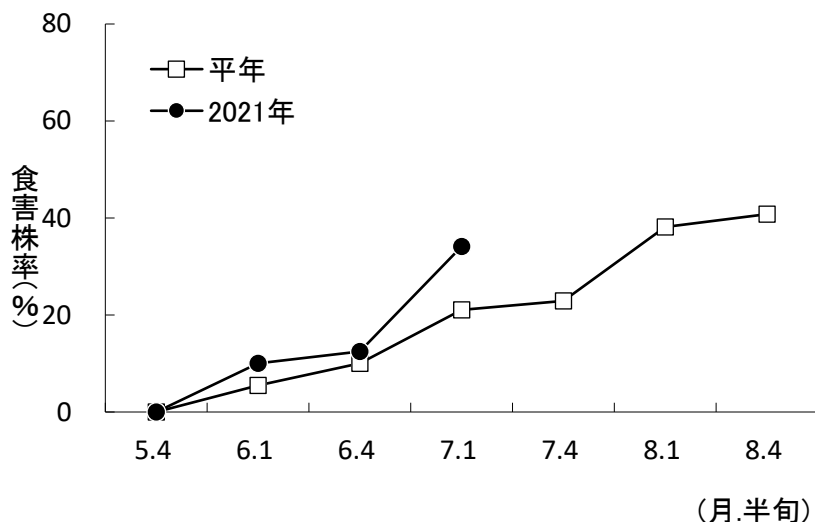


図-1 巡回調査におけるネギアザミウマの食害株率の推移（ねぎ（夏どり））

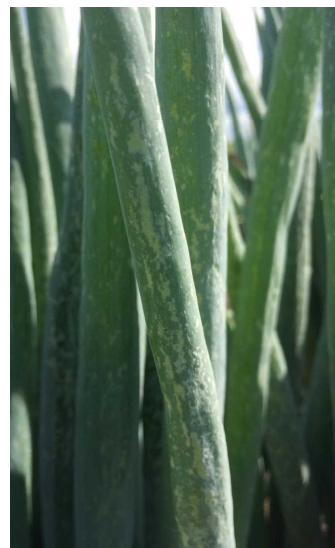


図-2 ネギアザミウマの食害を受けた葉

表-1 ネギアザミウマの防除薬剤

系統	農薬名	希釈倍数又は使用量	使用方法	使用時期	使用回数	各成分の総使用回数
a	ダイアジノン乳剤40	700～1,200倍	散布	収穫21日前まで	2回以内	2回以内
	マラソン乳剤	2,000～3,000倍	散布	収穫7日前まで	6回以内	6回以内
c	アグロスリン乳剤	2,000倍	散布	収穫7日前まで	5回以内	5回以内
	アディオン乳剤	3,000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	3回以内
d	リーフガード顆粒水和剤	1,500倍	散布	収穫7日前まで	2回以内	2回以内
g	アドマイヤー顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫14日前まで	2回以内	ア
	アドマイヤーフロアブル	2,000～4,000倍	散布	収穫14日前まで	2回以内	ア
	アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫3日前まで	2回以内	4回以内*1
g・i	ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	散布	収穫3日前まで	4回以内	イ
	ダントツ粒剤	6 kg/10a	株元散布	収穫3日前まで	4回以内	イ
	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内	3回以内*2
i	ミネクトデュオ粒剤	6 kg/10a	株元散布	収穫3日前まで	3回以内	ウエ
i	ベネビアOD	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内	エ
j	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫3日前まで	3回以内	3回以内
	ディアナS C	2,500倍	散布	収穫前日まで	2回以内	2回以内
l	グレーシア乳剤*3	2,000～3,000倍	散布	収穫7日前まで	2回以内	2回以内
	ハチハチ乳剤*3	1,000倍	散布	収穫7日前まで	2回以内	2回以内
	ファインセーブフロアブル*3	2,000倍	散布	収穫3日前まで	2回以内	2回以内

a：有機リン剤、c：合成ピレスロイド剤、d：ネライストキシシン剤、g：ネオニコチノイド剤、  
i：ジアミド系剤、j：マクロライド系剤、l：その他殺虫剤

\*1：は種時の土壌混和、育苗トレイへの灌注及び定植時の株元散布は合計1回以内、生育期の株元灌注は1回以内、  
散布及び定植後の株元散布は合計2回以内

\*2：は種時の土壌混和は1回以内、植付時の土壌混和及び定植当日までの株元散布は合計1回以内

\*3：その他殺虫剤に記載のある3剤は、作用機構が異なる薬剤である。

※同一符号は同一成分が含まれていることを示す。( )内は各成分の総使用回数を示す。

ア：イミダクロプリド(3回以内(定植時までの処理は1回以内、散布は2回以内))

イ：クロチアニジン(4回以内(定植時までの処理は1回以内))

ウ：チアメトキサム(4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内))

エ：シアントラニリプロール(4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後の処理は3回以内(但し、株元灌注は1回以内)))

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660  
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326  
掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>